【　主日の三時課　】

司祭）我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

誦經Ⓐアミン。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

司祭）蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

誦經）アミン。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

來れ、我等の王・神に叩拝せん。

來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拝俯伏せん。

來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拝俯伏せん。

【 第１６聖詠　ダヴィドの祈禱 】

主よ、我の直を聽き、我の呼ぶを聆き納れ、僞なき口より出づる禱を受け給え。願わくは我を糺す判は、爾の顔より出で、爾の目は義に注がん。爾は已に我が心を驗し、夜中に臨み我を試みて得たる所なし、我が口は我の思に離れず。人の行爲に於ては、我爾が口の言に循いて、迫害者の途を愼めり。我が歩を爾の路に固めよ、我が足の蹶かざらん爲なり。神よ、我爾に籲ぶ、蓋爾我に聽かん。爾の耳を我に傾けて、我が言を聽き給え。爾を賴む者を爾の右の手に敵する者より救う主よ、爾の妙なる憐を顯し給え。我を眸子の如く護れ、爾が翼の蔭を以て、我を攻むる不虔者の面、我を環る我が靈の敵より我を覆い給え。彼等は己の脂に包まれ己の口にて高ぶり言う。今我が歩む度に我等を環り、目に狙いて、地に顚さんと欲す。彼等は獲物を貪る獅の如く、隱なる處に蹲る小獅の如し。主よ、起きよ、彼等に先だちて彼等を殪し、爾の劒を以て我が靈を不虔者より救え。主よ、爾の手を以て人、卽ち世の人より救い給え。彼等の業は今生にあり、爾は爾の寶藏より其腹を充たし、彼等の子は饜きて餘を其裔に殘さん。惟我は義を以て爾の顔を見んとす、覺め起きて爾の容を以て自ら饜き足らん。

【 第２４聖詠　ダヴィドの詠 】

主よ、爾に我が靈を擧ぐ。吾が神よ、爾を恃む、我に世世愧なからしめよ、我が敵を我に勝ちて喜ばしむる毋れ。凡そ爾を恃む者にも愧なからしめ給え、妄に法を犯す者は願わくは愧を得ん。主よ、我に爾の道を示し、我に爾の道を訓えよ。我を爾の眞理に導きて、我を訓え給え、蓋爾は我が救の神なり、我日日に爾を恃めり。主よ、爾の鴻恩と爾の慈憐とを記憶せよ、蓋是れ永遠よりあるなり。我が少

き時の罪と過とを記憶する毋れ、主よ、爾の仁慈に依り、爾の慈憐を以て、我を記憶せよ。主は仁なり、義なり、故に罪人に道を訓え示す、謙遜の者を義に導き、謙遜の者に己の道を教う。凡そ主の道は其約と其啓示とを守る者に在りて慈憐なり、眞實なり。主よ爾の名に因りて我が罪を赦し給え、其大なるを以てなり。誰か主を畏るる人たる、主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居り、彼の裔は地を嗣がん。主の奥義は彼を畏るる者に屬し、彼は其約を以て之に顯す。我が目常に主を仰ぐ、其我が足を網より出すに因る。我を顧み、我を憐め、我獨にして苦めらるるに因る。我が心の憂益多し、我が苦難より我を引き出せ、我が困苦、我が勞瘁を顧み、我が諸の罪を赦し給え。我が敵を觀よ、何ぞ多き、彼等が我を怨む恨は何ぞ甚しき。我が靈を護りて我を救い、我が爾に於ける恃に愧なからしめ給え。願わくは無玷と義とは我を護らん、我爾を恃めばなり。神よ、イズライリを其諸の憂より救い給え。

【　第５０聖詠　伶長に歌わしむ。ダヴィドの詠。ダヴィド ヴィルサヴィヤに入りて後、預言者ナタンの彼に來りし時に此を作れり。　】

神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が惠の多きに因りて我の不法を抹し給え。屡我を我が不法より洗い、我を我が罪より清め給え、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、惡を爾の目の前に行えり、爾は爾の審斷に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。イッソプを以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌え、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給え、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給え。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給え。我を爾の顔より逐うこと毋れ、爾の聖神を我より取り上ぐること毋れ。爾が救の喜を我に還せ、

主宰たる神を以て我を固め給え。我不法の者に爾の道を教えん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讃美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我此を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給わず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イェルサリムの城垣を建て給え。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、光榮は父と子と聖神に歸す、

【 主日の復活讃詞（トロパリ） 第２調 】

死せざる生命よ、爾死に降りし時、神の性の光にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復活せしめし時、天軍皆呼びて曰えり、生命を賜う主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

今も何時も世世に、アミン。

生神女よ、爾は實の葡萄の枝、我等の爲に生命の果を結びし者なり、女宰よ、爾に祈る、聖使徒と共に我が靈の憐を蒙らんことを祈り給え。

主は日日に崇め讃めらる。神は我等に重荷を負わすれども、亦我等を救い給う。神は我等の爲に救の神なり。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

司祭）蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經）アミン。

【　主日の復活小讃詞（コンダク）　第２調　】

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕に喜び、アダムは共に樂しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誡に向わしめ給え、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ヘルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壞らずして神 言 を生みし實の 生 神 女たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭）主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸 聖 神父の祈禱に依りて我等を 憐 めよ。

誦經）アミン。

主 宰 神 父 全 能 者、主 獨 生の子イイススハリストス及び聖 神、惟 一の神 性、惟 一の能 力 よ、我 罪 人を 憐 み、爾 が知る 所 の法を以て我不當の僕を救い給え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

【　主日の六時課　】

誦經Ⓑ來れ、我等の王・神に叩 拜せん。

來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん。

來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん。

【　第５３聖詠　伶長に悉く弾きて歌わしむ。ダヴィドの教訓。ジフェイ人來たりてサウルに告げて、ダヴィド我等の處に匿るるに非ずやと、言いし後に此を作れり。　】

神よ、 爾 の名を以て我を救い、 爾 の 力 を以て我を判き給え。神よ、我が 禱 を聽き、我が口の 言 を聆き納れ給え、蓋 外 人は起ちて我を攻め、強き者は我が 靈 を覓む、彼等は神を 己 の前に置かず。視よ、神は我の援助なり、主は我が 靈 を固め給う。彼は我が敵に其 惡 を報いん、 爾 の眞 實 を以て彼等を 滅 し給え。主よ、我 心 を盡して 爾 に 祭 を獻げ、 爾 の名を讃め揚げん、其 善 なるを以てなり、蓋 爾 は我を 諸 の艱 難より救い給えり、我が目は我の敵を見たり。

【　第５４聖詠　伶長に琴を弾きて歌わしむ。ダヴィドの教訓。　】

神よ、我が禱を聆き我が願より匿るる毋れ。我に耳を傾けて我に聽き給え、我は悲の中に呻い、敵の聲、不虔者の責に由りて擾う、蓋彼等は不法を以て我を誣い、怒を以て我に仇す。我が心は我の衷に慄き、死の恐惶は我に及べり、驚懼と戰慄とは我に臨み、恐惶は我を圍めり。我言えり、執か我に鴿の翼を予うるあらん、我飛び去りて安を獲ん、遠く離れて野に居らん、急ぎて旋風と暴風とを避けん。主よ、彼等を亂し、其舌を分けよ、蓋我は暴虐と爭競とを城邑の中に見る、彼等は晝夜其城垣の上を繞る。其中に毒惡と患難あり、殘害は其中にあり、詭詐と誑騙とは其衢を離れず。我を謗る者は敵に非ず、敵ならば我之を忍ばん、我に高ぶる者は我が仇に非ず、仇ならば我之を避けん、乃爾曾て我と儔しき者、我の友、我の近き者たり、我と親しき談を爲しし者、偕に神の宮に行きし者たり。願わくは死は彼等に至らん、願わくは彼等は生きながら地獄に降らん、惡事は其住所に、其間に在ればなり。惟我神に籲ばん、主乃我を救わん。晩と朝と午に我祈りて呼ばん、彼乃我の聲を聽かん、我が靈を我を攻むる者より平安に脱れしめん、彼等夥しければなり。神は聽かん、世の前より在す者は彼等を卑くせん、蓋彼等に改新なし、彼等は神を畏れず、己の手を彼等と和睦する者に伸べ、己の約に背けり、其口は膏より滑らかにして、其心に仇を懷き、其言は油より柔らかにして、是れ白刃なり。爾の重任を主に負わしめよ、彼は爾を扶けん。彼は何時も義人に撼くを容さざらん。神よ、爾は彼等を滅の阱に陷れん、血を流し、貳を行う者は生きて其日の半にも至るを得ず。主よ、惟我爾を賴む。

【 第９０聖詠　ダヴィドの讃歌 】

至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が賴む所の我の神なりと。彼は爾を猟者の網より、滅亡の疫より脱れしめん、彼は其羽にて爾を覆わん、其翼の下にて爾危からざるを得ん、彼の眞實は楯なり、鎧なり。爾は夜の震驚と晝の流矢、闇冥に行く行疫と正午

に暴す瘴 疫 を懼れざらん。千 人 爾 の 側 に、萬 人 爾 の右に仆るとも、爾 に近づかざらん、爾 只目を注ぎて不虔の者の 報 を見ん、蓋 爾 謂えり、主は我の 恃 なりと、爾 至 上 者を択びて、爾 の避 所と爲せり。惡は 爾 に臨まず、疫 癘 は 爾 の住所に近づかざらん、蓋 爾 の爲に其 天使に命じて、爾 の 凡 の路に 爾 を護らしめん、彼等其手にて 爾 を抱えて、 爾 の足を石に 躓 かざらしめん。 爾 蝮 と毒 蛇 とを踐み、獅子と大 蛇 とを蹈まん。彼 我を愛するに因りて、我 之を援けん、彼 我の名を識るに因りて、我 之を衛らん。我を呼ばば、我 彼に聽かん、憂 の時 我 彼と偕にし、彼を援け、彼を榮せん、壽 考 を以て彼に飽かしめ、我の 救 を彼に 顯 さん。

光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光 榮は 爾 に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光 榮は 爾 に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光 榮は 爾 に歸す、

主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、光 榮は父と子と聖 神に歸す、

【 主日の復活讃詞（トロパリ） 第２調 】

死せざる生命よ、 爾 死に降りし時、神の性の 光 にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復 活せしめし時、天 軍 皆呼びて曰えり、生命を賜う主ハリストス吾が神よ、光 榮は 爾 に歸す。

今も何時も世世に、アミン。

生 神 童 貞 女よ、我等 夥 しき罪ありて、 己 の 勇 なきに因りて、 爾 より生れし者に祈り給え、蓋 母の 禱 は多く主 宰の慈憐を得べし、至 淨 の者よ、罪 人の 祈を棄つる勿れ、我等の爲に甘んじて 苦 を受け給いし者は仁 慈にして人を救う事を能すればなり。

主よ、願わくは 爾 の慈憐は 速 に我等を迎えん、我等 甚 衰 えたればなり、神 我等の 救 世 主よ、 爾 の名の光 榮に因りて我等を助け給え、 爾 の名に因りて我等を救

い、我等の罪を淨め給え。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

司祭）蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經）アミン。

【　主日の復活小讃詞（コンダク）　第２調　】

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕に喜び、アダムは共に樂しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誡に向わしめ給え、我等

の 靈 を聖にし、 體 を 潔 くし、 慮 を直くし、思 を淨くし、我等を 悉 くの 憂 と 禍 と 疾 より救い、 爾 の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其 園 に衛り 導 かれて、信の一なると 爾 の近づき難き光 榮を悟るに至らせ給え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ヘルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく榮え、貞操を壞らずして神 言 を生みし實の 生 神 女たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭）主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸 聖 神父の祈禱に依りて我等を 憐 めよ。

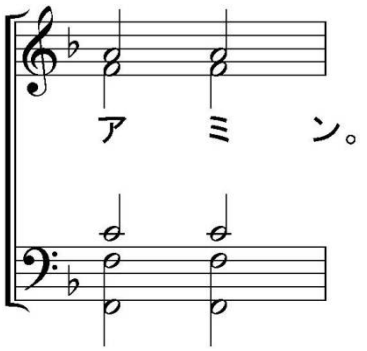
誦經）アミン。

神 天 軍の主、萬 物の造 成 者、 爾 が量り難き仁慈と慈憐を以て我が 族 を救わんが爲に 爾 の獨 生子吾が主イイススハリストスを 遣 し、其 貴 き 十 字架にて我等の罪の書 券を破り、又 是を以て闇 冥の首 領 と權 柄とに勝ちし至仁なる主 宰よ、我等罪なる者の此の感 謝と祈願との 禱 を納れて、 諸 害を爲す暗き罪、及び凡そ我等を 殘 わんと欲する見ゆる又見えざる諸 敵より我等を救い給え。我が 體 を 爾 を畏るる 畏 に釘うち給え、我が 心 を 邪 なる 言 或は思 に 傾 かしむる勿れ、乃 爾 を 愛する愛を以て我等の 靈 を刺して、我等に常に 爾 を仰ぎ、 爾 よりする 光 に 導かれて、 爾 近づき難き永 存の 光 を望み、 爾 無原の父、 爾 の獨 生の子、及び至聖至仁 生 を 施 す神に斷えず讃 詠と感 謝とを 奉 らしめ給え、今も何時も世世に、アミン。

【　主日聖体礼儀　】

司祭）（　黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり、至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讃美を揚げんとす、　）

司祭）父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【　大聯禱　】

司祭）我等安和にして主に禱らん、



司祭）上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭）全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱ら

ん、



司祭) 此(こ)の聖堂(せいどう)、及(およ)び信(しん)と 愼(つつしみ) と神(かみ)を畏(おそ)るる 心(こころ) とを以(もつ)て此(ここ)に來(きた)る者(もの)の爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、



司祭) 教會(きょうかい)を 司(つかさど) る尊貴(そんき)なる我等(われら)の全日本(ぜんにほん)の府主教(ふしゅきょう) セラフィム、司祭(しさい)の尊品(そんぴん)、ハリストスに因(よ)る輔祭職(ほさいしょく)、悉(ことごと) くの教衆(きょうしゅう)、及(およ)び衆人(しゅうじん)の爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、



司祭) 我國(わがくに)の天皇(てんのう)、及(およ)び國(くに)を 司(つかさど) る者(もの)の爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、



司祭) 此(こ)の都邑(まち)と 凡(およそ) の都邑(まち)と地方(ちほう)の爲(ため)、及(およ)び信(しん)を以(もつ)て此(こ)の中(うち)に居(お)る者(もの)の爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、



司祭) 氣候 順 和、五穀 豐 穰 、天下泰 平の爲に主に禱らん、



司祭) 航 海する者、旅 行する者、 病 を患うる者、艱 難に遭う者、 擄 となりし者、及び 彼等の 救 の爲に主に禱らん、



司祭) 我等 諸 の憂愁と忿怒と危 難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



司祭) 神よ、 爾 の恩 寵 を以て、我等を佑け救い 憐 み護れよ、

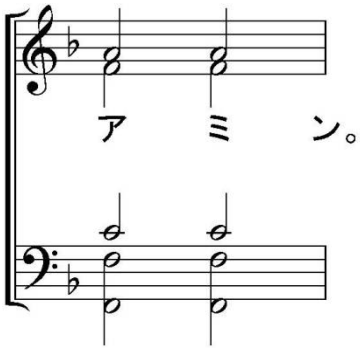


司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豐なる恩澤と爾の愛憐とを施し給え、)

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【　第一アンティフォン 第１０２聖詠　】




れ
かれはなんぢがもろもろのふほうをゆるし
彼爾諸不法赦
なんぢがもろもろのやまいをいやす
爾諸疾療
mf
なんぢのいのちをはかよりすくいあ
爾生命墓救憐
mf
p
p
わ れ み と め ぐ み と を な ん ぢ に こ う む ら せ
恵 爾 冠
こうふくをなんぢののぞみにあかしむなんぢ
幸福爾望飽爾


が わ か が え さ る る こ と わ し の ご と
若 か 復 え 鷲 如
く
わ が た ま し い よ しゅ を ほ め あ げ よ わ が ちゅ
我 靈 主 讃 揚 我 中
う し んよ そ の せ い な る な を ほ め あ
心 其 聖 名 讃 揚
rit.
げ よ しゅ よ なん ぢ は あ が め ほ めら
主 爾 崇 讃
rit.
る

【　小聯禱　】

司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

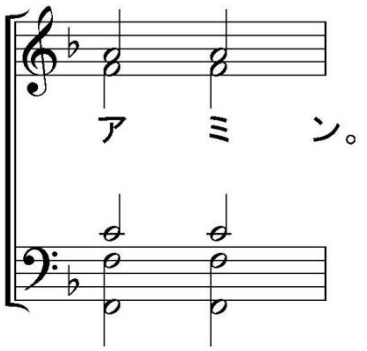


司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【　第二アンティフォン　第１４５聖詠　】




かれがはかるところはそのひにきゆ
彼謀所即日消
イア コフのかみにたすけらるる
神佑
ひとはさいわいなり
人福
しゅかみてんちとうみとそのうちにあるもの
主神天地海其中在物
をつくりながくしんじつをまもり
造永眞實守
せめらるるもののためにさばきをな
迫者爲判


しうるものにかてをあたうるしゅをたのむひ
飢者糧與主恃人
とはさいわいなり
福
しゅはめしうどをときめしいのめをひら
主囚人釋瞽者目開
きかがめられしものをおこしぎじんをあい
屈者起義人愛
す
しゅはたびとをまもりみなしごとやもめを
主羈客護孤子寡婦


た すけ ふけんしゃの みちを くつが えす
佑 不虔者 途 覆
しゅ は えいえんに おうと なら ん シオンよ なんぢ の か
主 永遠 王 爾 神
み はよよに おうと なら ん
世 世 王

【　神の獨生の子　】


こ うえ い はち ちと こと せ いしんに き すい まも い
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何
つ もよよ に アミ ン。
時
かみの どく せ いの こ なら びに こと ば よ し
神 獨 生 子 並 言 死


せざるものにしてわれらをすくわんがためあまん
者我等救爲甘
じてせいなるしょうしんぢょえいていどうぢょマリヤ
聖生神女永貞童女
よりみをとりかみのせいをかえずしてひ
身取神性易人
ととなりじゅうじかにくぎうたれしをもって
十字架釘死以
しをふみやぶりしハリストスかみよせいさんしゃ
死踏破神聖三者
のいつとしてちちとせいしんとともにさんえ
一父聖神共讃榮



【　小聯禱　】

司祭）我等復又安和にして主に禱らん、



司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭）（　黙誦：我等に此の公同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者にも其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を

其利益の爲に應わしめて、我等に今世には 爾 の眞理を識り、來世には永遠の生命を得るを給え、　）

司祭）蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【　第三アンティフォン　眞福九端　】




ば な り
な く も の は さ い わ い な り か れ ら な ぐ
泣 者 福 彼 等 慰
さ め を えん と す れ ば な り
得
おんじゅう な る も の は さ い わ い な り か れ
温 柔 者 福 彼
ら ち を つがん と す れ ば な り
等 地 嗣
ぎ に う え か わ く も の は さ い わ い な
義 飢 渇 者 福



誦經Ⓒ我等盜賊の聲を爾に奉りて祈る、救世主よ、爾の國に於て我等を憶い給え。



誦經Ⓒ人を愛する主よ、爾が我等の爲に受け給いし十字架を爾に奉りて、我が罪過の赦を求む。



誦經Ⓒ人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我等爾(われらなんぢ)の葬(ほうむり)と復活(ふくかつ)とに伏拜(ふくはい)す、爾(なんぢ)は此等(これら)を以(もつ)て世界(せかい)を朽壞(きゅうかい)より脫(のが)れしめ給(たま)えり。





誦經Ⓒ主よ、爾の死にて死は呑まれたり、救世主よ、爾は復活を以て世界を救い給えり。





誦經Ⓒ爾は墓より復活して、攜香女に遇い、彼等に爾の復活を使徒に傳えんことを命じ給えり。





誦經Ⓒハリストスよ、黑暗(くらやみ)に眠(ねむ)る者(もの)は爾地獄(なんぢぢごく)の深處(ふかみ)に輝(かがや)きし光(ひかり)を見(み)て復活(ふくかつ)せり。





誦經Ⓒ我等(われら)皆(みな)信(しん)を以(もつ)て父(ちち)を讚榮(さんえい)し、子(こ)に伏拜(ふくはい)し、聖神(せいしん)を歌頌(かしょう)せん。



誦經Ⓒ火(ひ)の狀(さま)の寶座(ほうざ)よ、慶(よろこ)べ、聘女(よめ)ならぬ聘女(よめ)よ、慶(よろこ)べ、神(かみ)を人(ひとびと)人(ひとびと)の爲(ため)に生(う)みし童貞女(どうていぢょ)、慶(よろこ)べ。

司祭)（ 默誦：主宰(しゅさい)・主(しゅ)・我等(われら)の神(かみ)、諸天(しょてん)に天使(てんしおよ)及び、天使首(てんししゅ)の品級(ひんきゅう)と軍隊(ぐんたい)とを立(た)て

て爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等と

偕に務め、共に爾の至善を讃榮する聖天使等の入るを致させ給え、蓋、

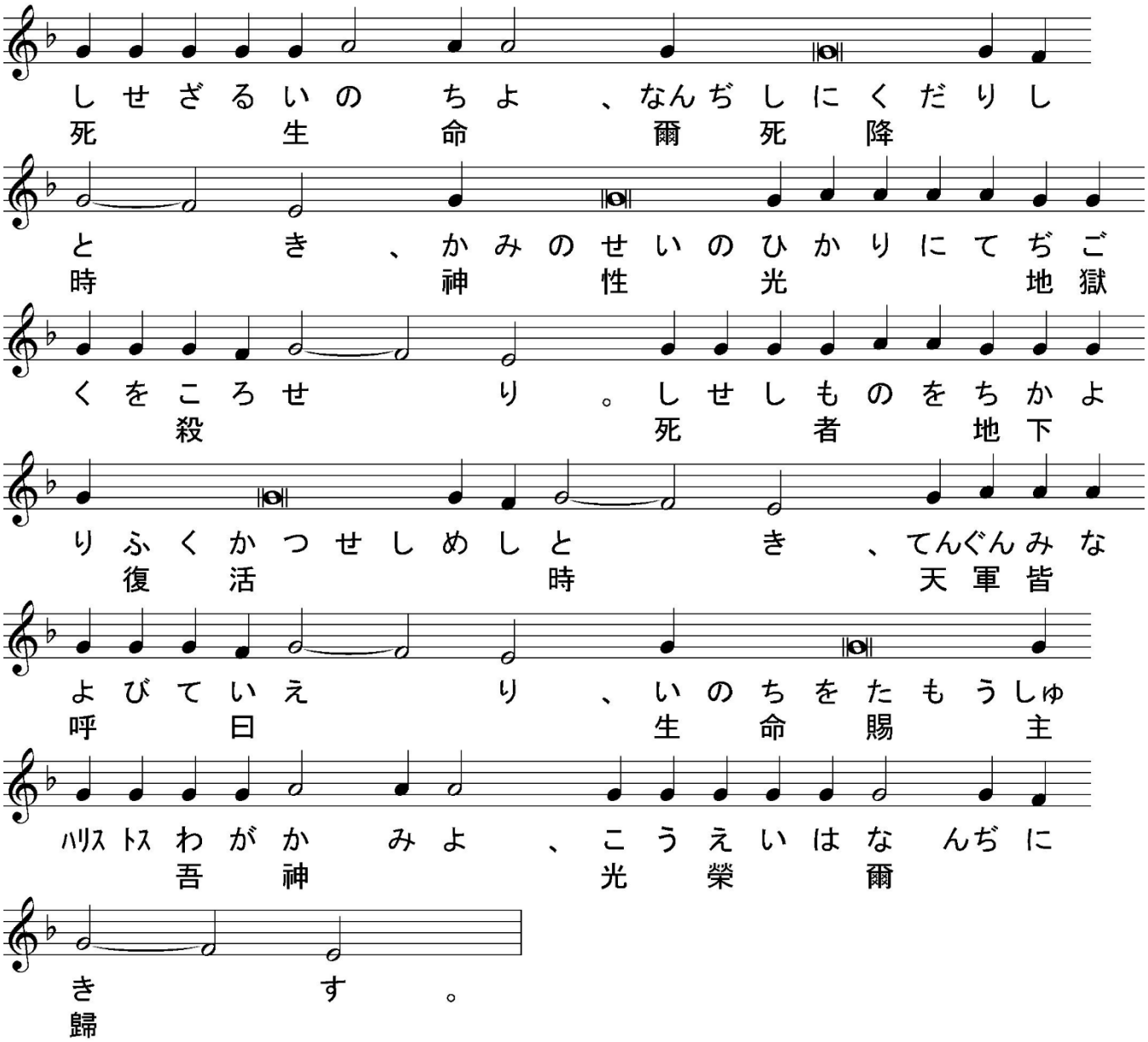
凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、　）

司祭）睿智、粛みて立て、

【　聖入の句　】



【　復活のトロパリ　第２調　】



【　日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ　第４調　】





【　日本の亜使徒聖ニコライのコンダク　第４調　】




きをぞくしんのことなし、かれらにか
屬神子爲彼等神
みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建
たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈
たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶
べよ。

【　復活のコンダク　第２調　】


いまもいつもよよに、アミン。
今何時世世
ぜんのうのきゅうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
全能救世主爾墓復
くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
活地獄奇蹟見
おのき、ししゃはおき、ぞうぶ
慄死者起造物
つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
見爾偕喜



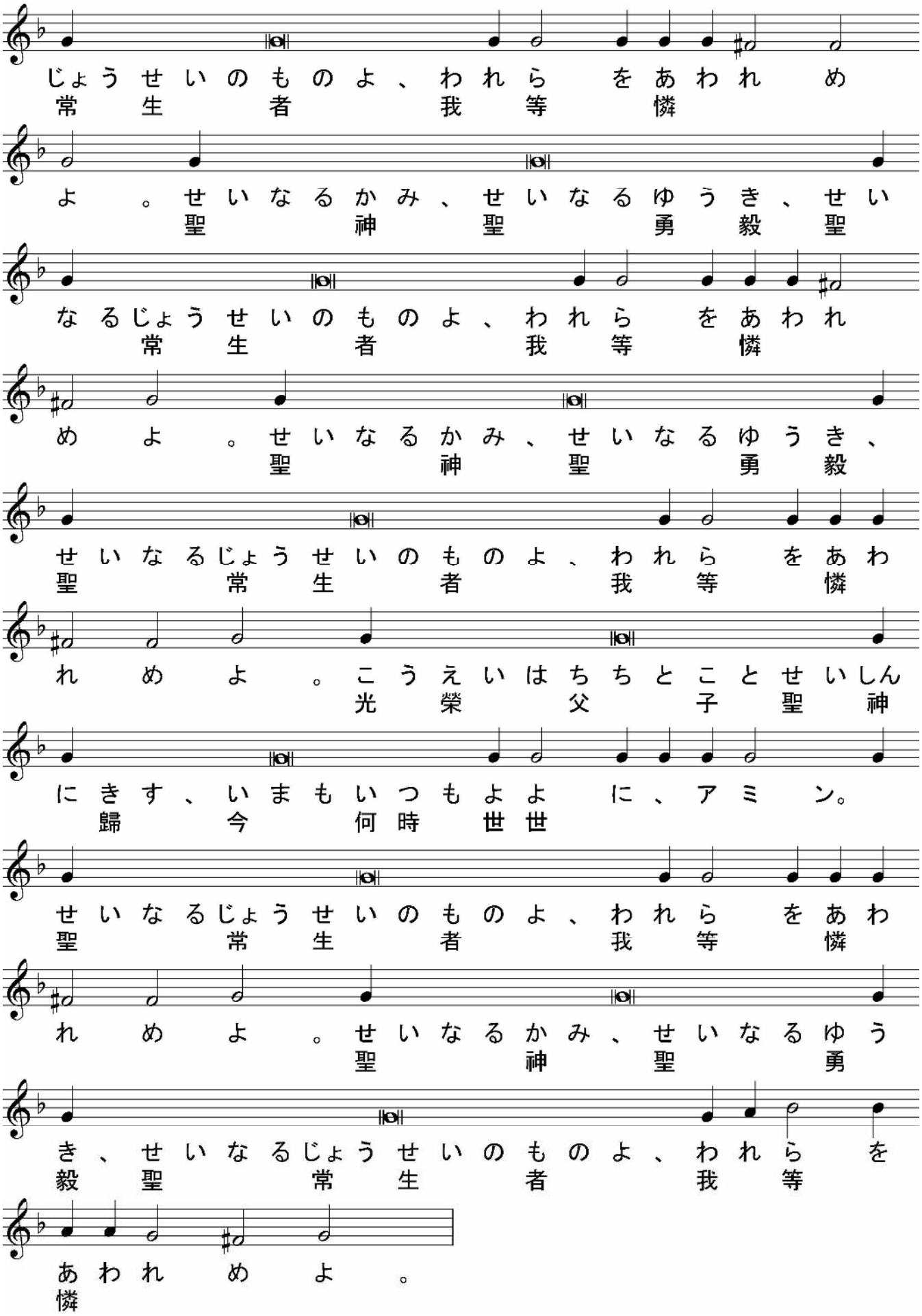
司祭)（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭) **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**



【 聖三祝文 】





司祭)（　黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、　）

【　提綱（プロキメン）　主日第２調　】

司祭）　慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經Ⓓ　爾の神にも、

司祭）　睿智、

誦經Ⓓプロキメン、第二の調、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、



誦經Ⓓ主は嚴しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



誦經Ⓓ主は、我が力、我が歌なり、



【　使徒經（アポストロス）　194端　コリンフ後書11章31節～12章9節　】

司祭）　睿智、

誦經Ⓓ聖使徒パヴェルがコリンフ人に達する後書の讀、

司祭）　謹みて聽くべし、

誦經Ⓓ兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世世に祝讃せらるる者は、我が謊らざるを知る。ダマスクに於て、アレタ王の邑宰我を執えんと欲して、ダマスクの邑を守れり、我筐を以て牖より墻に循い、縋り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が

爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知る、此の人は十四年前に、（肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神之を知る、）第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其（肉體に在りてか、肉體の外に在りてか、知らず、神之を知る、）樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は我の弱きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞を言わん、然れども我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬らん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、卽サタナの使なり、我を擊たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我より離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、我の恩寵は爾に足れり、蓋我の能は弱き中に行わる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の我の内に寓らん爲なり。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ、永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていないことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視したことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた――それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。この人が――それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである―― パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

＊＊

【　アリルイヤ　主日第２調　】

司祭) 爾(なんぢ)に平安(へいあん)、

誦經Ⓓ 爾(なんぢ)の神(しん)にも、

司祭) 睿智(えいち)、

誦經Ⓓアリルイヤ、



誦經Ⓓ願(ねが)わくは主(しゅ)は憂(うれい)の日(ひ)に於(おい)て爾(なんぢ)に聽(き)き、イァコフの神(かみ)の名(な)は爾(なんぢ)を扞(ふせ)ぎ衛(まも)らん、



誦經Ⓓ主(しゅ)よ、王(おう)を救(すく)え、又(また)我等(われら)が爾(なんぢ)に呼(よ)ばん時(とき)、我等(われら)に聽(き)き給(たま)え、



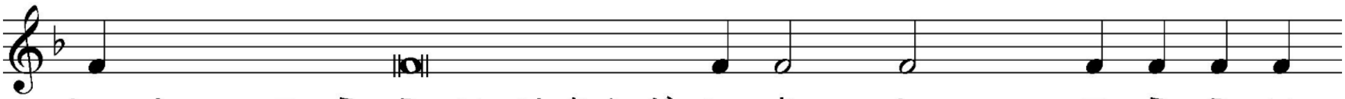
司祭) (默誦 : 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(ねんめ)の目を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うち)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜ぶ所(ところ)を思い且つ行(おこな)いて、屬(ぞくしん)神の生活(せいかつ)を過ぐるを致させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、爾(なんぢ)は我(わ)が靈(たましい)と體(からだ)との光照(こうしょう)なり、我等(われらなんぢ)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の無原の父と至聖至善にして生命(いのち)を施(ほどこ)す爾(なんぢ)の神(しん)とに光榮(こうえい)を獻(けん)ず、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。)

【　福音經（エヴァンゲリオン）　ルカ福音書 17 端　5 章 1～11 節　】

司祭）睿智（えいち）、肅（つつし）みて立（た）て聖福音經（せいふくいんけい）を聽（き）くべし、衆人（しゅうじん）に平安（へいあん）、



司祭）ルカ傳（でん）の聖福音經（せいふくいんけい）の讀（よみ）、





司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、彼（か）の時（とき）イイスス、ゲンニサレトの湖（みづうみ）の濱（はま）に立（た）ちて、二（ふたつ）の舟（ふね）の湖（みづうみ）に在（あ）るを見（み）たり、漁者（ぎょしゃ）は舟（ふね）を離（はな）れて網（あみ）を洗（あら）えり。彼（かれ）はシモンに屬（ぞく）する一（ひとつ）の舟（ふね）に登（のぼ）りて、少（すこ）しく岸（きし）より離（はな）れんことを請（こ）い、坐（ざ）して舟（ふね）より民（たみ）を教（おし）えたり。語（かた）り竟（おわ）りて、シモンに謂（い）えり、深（ふか）き處（ところ）に移（うつ）り、網（あみ）を下（おろ）して、漁（すなどり）せよ。シモン對（こた）えて曰（い）えり、夫子（ふうし）よ、我（われ）終夜（よもすがら）勞（ろう）して、得（う）る所（ところ）なかりき、然（しか）れども爾（なんぢ）の言（ことば）に依（よ）りて、我（われ）網（あみ）を下（おろ）さん。既（すで）に之（これ）を行（おこな）いて、魚（うお）を圍（かこ）めること甚（はなはだ）多（おお）く、網（あみ）裂（さ）くるに至（いた）れり。乃（すなわち）他（た）の舟（ふね）に在（あ）る侶（とも）を招（まね）きて、來（きた）り助（たす）けしむるに、彼等（かれら）來（きた）りて、魚（うお）二（ふたつ）の舟（ふね）に牣（み）ちて、幾（ほとん）ど沈（しづ）まんとせり。シモン ペトル之（これ）を見（み）て、イイススの膝下（ひざもと）に伏（ふ）して曰（い）えり、主（しゅ）よ、我（われ）を離（はな）れよ、我（われ）罪人（ざいにん）なればなり。蓋（けだし）彼（かれ）及（およ）び彼（かれ）と偕（とも）に在（あ）りし者（もの）は、皆（みな）漁（すなど）りたる魚（うお）の爲（ため）に甚（はなはだ）驚（おどろ）けり、シモンの侶（とも）たりしゼヴェデイの子（こ）イアコフ及（およ）びイオアンも亦（また）然（しか）り。イイスス シモンに謂（い）えり、懼（おそ）るる勿（なか）れ、今（いま）より後（のち）爾（なんぢ）人（ひと）を漁（すなど）らん。彼等（かれら）舟（ふね）を岸（きし）に曳（ひ）き、一切（いつさい）を舍（す）てて、彼（かれ）に從（したが）えり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」。そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがは

いって、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

＊＊



【　重聯禱　】

司祭）我等皆　靈　を全うして曰わん、我等の思を全うして曰わん、



司祭）主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



司祭）神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



司祭）又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



司祭）又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



司祭) 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の爲に禱る、



司祭) 又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、



司祭) 又此の至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて爾の大にして豐なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



（　※　特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。　）

司祭)（ 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民に遣し給え、 ）

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) 義(ぎ)の福音経(ふくいんけい)を彼等(かれら)に啓(ひら)かん、



司祭) 彼等(かれら)を其聖(そのせい)・公(こう)・使徒(しと)の教会(きょうかい)に一(いつ)にせん、



司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、彼等(かれら)を救(すく)い憐(あわれ)み佑(たす)け護(まも)れよ、



司祭) 啓蒙者(けいもうしゃ)よ、爾等(なんぢら)の首(こうべ)を主(しゅ)に屈(かが)めよ、



司祭)（ 黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、 爾 の獨生子・神・我が主イイススハリストスを 遣 して人間の 救 となしし者よ、 爾 の僕・啓蒙者・其 首 を 爾 に屈めし者を 顧 み、時に 随 いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の 赦 、不朽の 衣 を賜い、彼等を 爾 が聖・公・使徒の 教 會に一にし、彼等を 爾 の選ばれたる群に合せ給え、 ）

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、 爾 父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時も世世に、



【 信者の聯禱１ 】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信者復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 睿智、

司祭) (黙誦 : 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過とのために祈禱するを赦し給いしを爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人のために、爾に祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝うる者となし給え、我等爾が聖神の力にて此の爾の奉事のために立てし者を、定罪なく、躓なく、其良心の潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となして、爾我等に聽き、爾が哀憐の多きに依りて、我等のために仁慈の者となるを致せ、)

司祭) 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 信者の聯禱２ 】

司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、我等(われら)を佑(たす)け救(すく)い憐(あわれ)み護(まも)れよ、



司祭) 睿智(えいち)、

司祭) (黙誦：善(ぜん)にして人(ひと)を愛(あい)する主(しゅ)や、我等(われら)復(また)且(かつ)数(しば)し爾(なんぢ)に俯伏(ふふく)し、爾(なんぢ)に禱(いの)る、我等(われら)の禱(いのり)を顧(かえり)みて、我等(われら)の靈(たましい)と體(からだ)とを凡(およ)そ肉體(にくたい)と靈神(れいしん)との穢(けがれ)より潔(いさぎよ)くし、我等(われら)に、玷(きず)なく、定罪(ていざい)なく、爾(なんぢ)の聖(せい)なる祭壇(さいだん)の前(まえ)に立(た)つを賜(たま)え、神(かみ)や、我等(われら)と偕(とも)に祈禱(きとう)する者(もの)にも、生命(いのち)と信(しん)と屬神(ぞくしん)の智識(ちしき)との進歩(しんぽ)を與(あた)え給(たま)え、彼(かれ)等(ら)が常(つね)に畏(おそれ)と愛(あい)とを以(もつ)て爾(なんぢ)に務(つと)めて、玷(きず)なく、定罪(ていざい)なく、爾(なんぢ)の聖機密(せいきみつ)を領(う)け、爾(なんぢ)の天國(てんごく)に入(い)るに勝(た)うる者(もの)となるを得(え)せしめ給(たま)え、)

司祭) 我等常(われらつね)に爾(なんぢ)が權柄(けんぺい)の下(もと)に護(まも)られて、光榮(こうえい)を爾(なんぢ)父(ちち)と子(こ)と聖神(せいしん)に獻(けん)ずるが爲(ため)なり、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、



【 ヘルヴィムの歌 】


われら つつしんで ヘルヴィムに のっと
我 等 慎 則
り ヘルヴィムに の っと り
則
せ い さんの うた を い の ち を ほ ど
聖 三 歌 生 命 施
こ す の せ い さんしゃ に た て ま つ り
聖 三 者 獻
て
こ の よ の つ と め を し り ぞ く べ し
世 勤 退 可



司祭)（ 黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊なる聖血の機密を行うに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たるる者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、 ）

司祭)（ 黙誦: 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の王を戴かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。

我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

今此の世の　慮　を 悉 く 退 く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉 る萬 有の王を 戴 かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。

我等奥 密にしてヘルヴィムを 像 り、聖 三の歌を生命を 施 す三 者に歌い、今此の世の　慮　を 悉 く 退 く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉 る萬 有の王を 戴 かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。　）

【　大聖入　】

司祭）願 くは主・神は其 國に於て、我が國の天 皇 及び國を 司 る者を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

願 くは主・神は其 國に於て、教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教 セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世世に、

願 くは主・神は其 國に於て、已に寝りし府主 教 セルギイ、府主 教 イリネイ、府主 教 ウラディミル、府主 教 フェオドシイ、府主 教 ダニイル、大 主 教 ニコライ、主 教 ニコライ、主 教 ペトル、（　及び殊に記憶せらるる　某　）我等の已に寝りし家族、兄 弟姉妹、　諸　の縁 者、朋 友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

願 くは主・神は其 國に於て、爾　衆　正　教 のハリスティアニン等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、







司祭)（ 黙誦：尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、浄き布に裹み、香料にて覆い、新なる墓に藏めり、

ハリストスよ、爾は神なるにより、體にて墓に在り、靈にて地獄に在り、右盜と偕に天堂に在り、父と聖神と共に寶座に在り、限なき者として一切を滿て給えり、

ハリストスよ、我が復活の泉たる爾の墓は、生命を施す者、地堂より美しき者、実に如何なる王の宮よりも耀ける者と顯れたり、

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、浄き布に裹み、香料にて覆い、新なる墓に藏めり、

主よ、爾の惠に因りて恩をシオンに垂れ、イェルサリムの城垣を建て給え、其時に爾義の祭、獻物と燔祭を喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす、 ）

【　増聯禱　】

司祭）我等主の前に吾が禱を増し加えん、



司祭）獻げたる尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭）此の聖堂、及び信と愼と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



司祭）我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) 我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭)（ 黙誦：主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讃美の祭を受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに勝うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供えられたる祭品と爾の衆人とに居るを致させ給え、 ）

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) 衆人に平安、



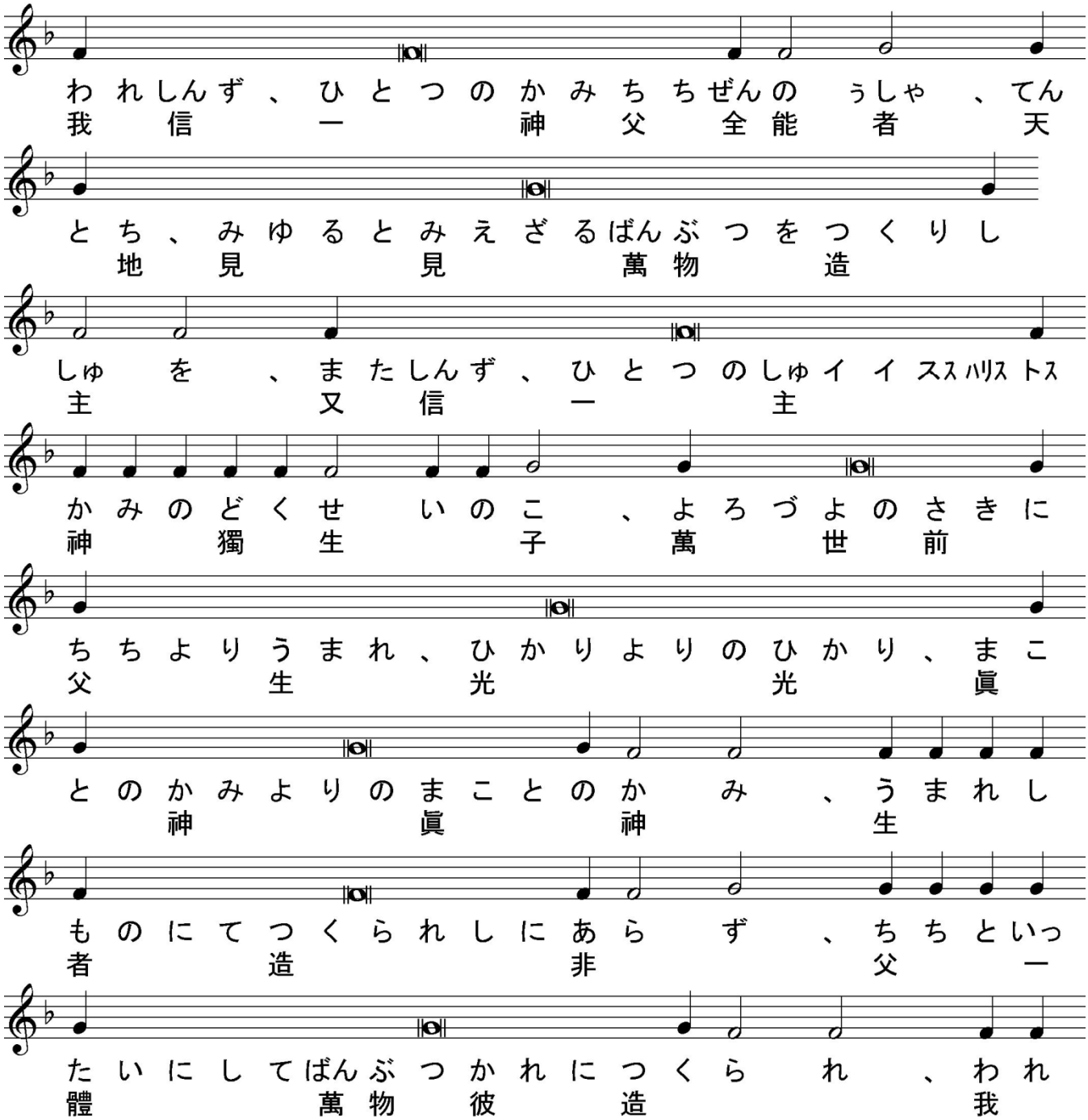
司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、





司祭)（ 黙誦: 主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、 ）

司祭) 門、門、敬みて聽くべし、




らひとびとのため、またわれらのすくいのた
等人人爲又我等救爲
めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて
天降聖神及童貞
いぢょマリヤよりみをとりひととなり、わ
女身取人我
れらのためにポンテイピラトのときじゅうじかに
等爲時十字
くぎうたれ、くるしみをうけほうむら
釘苦受葬
れ、だいさんじつにせいしょにかないてふく
第三日聖書應復
かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ
活天升父右坐
しこうえいをあらわしていけるものとしせ
光榮顯生者死
しものとをしんぱんするためにまたきたり、
者審判爲還來
そのくにおわりなからんを、またしんず、せ
其國終又信聖
いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい
神主生命施者父出
で、ちちおよびことともにおがまれほめら
父及子共拜讃



【　アナフォラ　】

司祭）正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる献物を奉らん、



司祭）願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆人と偕に在らんことを、



司祭) 心上(こころうえ)に向(むか)うべし、



司祭) 主(しゅ)に感謝(かんしゃ)すべし、



司祭) (黙誦 : 爾(なんぢ)を歌頌(かしょう)し、爾(なんぢ)を讃揚(さんよう)し、爾(なんぢ)を讃美(さんび)し、爾(なんぢ)に感謝(かんしゃ)し、爾(なんぢ)が一切(いっさい)治(おさ)むる處(ところ)に於(おい)て爾(なんぢ)に伏(ふ)し拜(おが)むは當然(とうぜん)にして義(ぎ)なり、蓋(けだし)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の獨生(どくせい)子(し)と爾(なんぢ)の聖神(せいしん)は、言(い)い難(がた)く、知(し)り難(がた)く、見(み)る可(べ)からず、測(はか)る可(べ)からず、永(なが)く在(あ)

り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復起し、及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事を行いて止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、顯れざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と爾の聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の手より領くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘルヴィム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者は爾の前に立ちて、　）

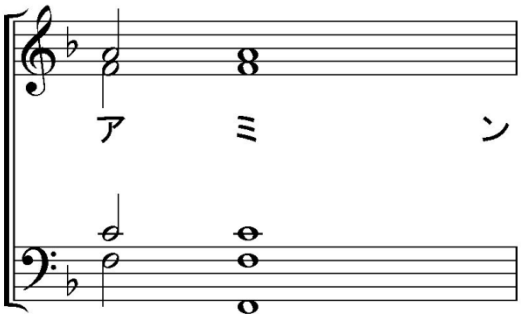
司祭）凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、





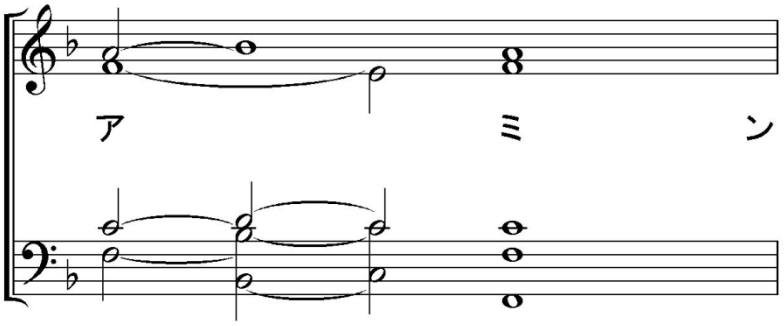
司祭)（ 黙誦：人を愛する主宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至聖なる哉、 爾 と 爾 の獨生子と 爾 の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、 爾 の光榮は威厳なり、 爾 は 爾 の世界を愛して、 爾 の獨生子を賜うに至り、凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の爲に付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讃し、成聖し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、 ）

司祭) **取りて食え、是我が體、 爾 等の爲に擘かるる者、罪の赦を得るを致す、**



司祭)（ 黙誦： 同く晩餐の後に爵を執りて曰く、 ）

司祭) **皆之を飲め、是我の新約の血、 爾 等及び衆くの人の爲に流さるる者、罪の赦を得るを致す、**



司祭)（ 黙誦：故に我等此の救を施す誡、及び凡そ我等の爲に有りし事、 即 十

字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨を記憶して、　）

司祭）　爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、



司祭）（　黙誦：我等復　爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願い祈り切に求む、　爾の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、　）

司祭）（　黙誦：第三時に　爾の至聖神を　爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐること勿れ、尚我等　爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、　潔き心を我に造り、正しき　靈を我の衷に改め給え、

第三時に　爾の至聖神を　爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、　）

司祭）**此の餅を将て、爾のハリストスの尊體と成し、アミン。**

此の爵中の者を将て、爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

（　黙誦：願くは此は領くる者の爲に、靈の警醒となり、諸罪の赦となり、爾が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、爾に於ける勇敢となり、審案或は定罪とならざらんことを、又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終り義なる靈の爲に爾に獻ず、　）

司祭）**特に至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤの爲、**

【　常に福　】





司祭)（　黙誦：聖預言者・前駆・授洗イォアン、光榮にして讃美たる聖使徒、及び爾が

諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懷きて寢りし者を記憶して、彼等を爾が顏の光の照す所に安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の主教品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を記憶せよ、

又此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の教會の爲、潔淨にして尊く生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を司る者の爲に爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、凡の敬虔と潔淨とを以て、恬靜安然にして生を度らんが爲なり、)

司祭) **主よ、殊に教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、彼を平安・無難・尊貴・壯健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳うる者として、爾の聖なる教會に與え給え、**



司祭) (默誦 : 主よ、我等が居る所の此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擔となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖堂に物を獻り、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及び我等衆人に爾の憐を垂れ給え、)

司祭) **並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讚榮**

讃頌するを賜え、今も何時も世世に、



司祭) 願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在らんことを、



【 增聯禱 】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



司祭) 已に獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香として

享(う)け、我等(われら)に報(むく)いて、神妙(しんみょう)の恩寵(おんちょう)と聖神(せいしん)の賜物(たまもの)とを降(くだ)すが爲(ため)に禱(いの)らん、



司祭) 我等諸(われらもろもろ)の憂愁(うれい)と忿怒(いかり)と危難(あやうき)とを免(まぬか)るるが爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、



司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、我等(われら)を佑(たす)け救(すく)い憐(あわれ)み護(まも)れよ、



司祭) 此(こ)の日(ひ)の純全(じゅんぜん)、成聖(せいせい)、平安(へいあん)、無罪(むざい)ならんことを主(しゅ)に求む、



司祭) 平安(へいあん)の天使(てんし)、正(ただ)しき教導師(きょうどうし)、吾(わ)が靈體(れいたい)の守護者(しゅごしゃ)を賜(たま)わんことを主(しゅ)に求(もと)む



司祭）我等の罪と　過　とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭）我等の　靈　に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭）我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭）我等の生命の　終　がハリスティアニンに適い、疾　なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏るべき審判に於て宜しき　對　をなすを賜わんことを求む、



司祭）信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭）（　黙誦：人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪とならざるを致させ給え、　）

【　天主經　】

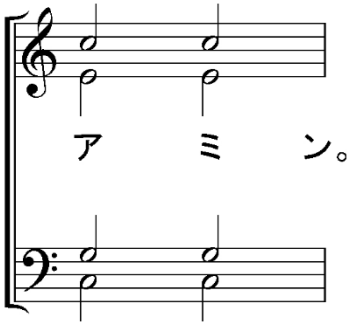
司祭）主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、




poco allargando
はなんぢのなはせいとせられ、なんぢのくに
爾名聖爾國
a tempo
pp
はきたり、なんぢのむねはてんにお
來爾旨天行
こなわるるがごとく、ちにも
如地
おこなわれん、わがにちようの
行我日用
cresc.
allargando
かてをこんにちわれらにあたえたまえ
糧今日我等與給
a tempo
pp
われらにおいめあるものをわれらゆるすが
我等債者我等免



司祭) 蓋 國と權 能と光 榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、



司祭) 衆 人に平 安、



司祭) 爾等(なんぢら)の首(こうべ)を主(しゅ)に屈(かが)めよ、



司祭) (黙誦 : 見(み)る可(べ)からざる王(おう)、其(そのはか)量(がた)り難(のうりょく)き能(もつ)力を以(ばんゆう)て萬有を畫定(かくてい)し、其慈憐(そのじれん)の多(おお)き
を以(もつ)て萬物(ばんぶつ)を無(む)より有(ゆう)となしし主(しゅ)よ、我等爾(われらなんぢ)に感謝(かんしゃ)す、主宰(しゅさい)よ、爾親(なんぢみづか)
ら爾(なんぢ)に首(こうべ)を屈(かが)めし者を天より顧(もの)み給(てん)え、蓋(かえりたま)血肉(けだしけつにく)に屈(かが)めしに非(あら)ず、
乃爾(すなわちなんぢおそ)畏るべき神に屈(かみかが)めり、故(ゆえ)に主宰(しゅさい)よ、爾(なんぢ)は此(ここ)に奠(そな)えたる者(もの)を、我等(われら)
衆人(しゅうじん)の善(ぜん)の爲(ため)に、各人(かくじん)の必要(ひつよう)に應(おう)じて等(ひとし)く頒ち、航海(わか)する者(こうかい)と偕(もの)に(とも)
航海(こうかい)し、旅行(りょこう)する者と偕(もの)に(とも)旅行し、靈體(りょこう)の醫師(れいたい)として、病(いし)を患(やまい)うる者(うれ)を醫(もの)
し給(いや)え、 (たま))

司祭) 爾(なんぢ)が獨生子(どくせいし)の恩寵(おんちょう)と慈憐(じれん)と仁愛(じんあい)とに因(よ)りてなり、爾(なんぢ)は彼(かれ)と至聖至善(しせいしぜん)にして生命(いのち)
を施(ほどこ)す爾(なんぢ)の神(しん)と偕(とも)に讃揚(さんよう)せらる、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に



司祭) (黙誦 : 主(しゅ)イイススハリストス我等(われら)の神(かみ)よ、爾(なんぢ)の聖(せい)なる住所(すまい)と爾(なんぢ)が國(くに)の光榮(こうえい)の寶(ほう)
座(ざ)より眷(かえりたま)み給(うえ)え、上(ちち)には父と偕(とも)に坐(ざ)し、此(ここ)には見(み)えずして我等(われら)と偕(とも)に居(お)る者(もの)よ、

來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血とを
我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、　）

司祭）　謹みて聽くべし、聖なる物は聖なる人に、



司祭）（　默誦：神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恒に食われて永く盡きず、
乃ち領くる者を聖にす、　）

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

（　奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第１４８聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に２節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。
　本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。
　日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス（其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等）、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。
　歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。　　）

【　領聖詞　第 148 聖詠　】



誦経Ⓔ

句１）其　悉　くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其　悉　くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

句２）日と月よ、彼を讃め揚げよ、　悉　くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

句３）諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

句４）主の名を讃め揚ぐべし、蓋　彼言いたれば、　即　成り、命じたれば、　即　造られたり、彼は之を立てて世世に至らしめ、則を與えて之を踰えざらしめん。

句５）地より主を讃め揚げよ、大魚と　悉　くの淵、火と霰、雪と霧、主の　言　に　従　う暴風、山と　悉　くの陵、　果　の樹と　悉　くの栢香木、野獣と　諸　の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少　年と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋　惟其名は高く擧げられ、其光榮は天地に徧し。

句６）彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の　榮　を高くせり。



【　信徒領聖　】

司祭）神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、



全員）主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃　爾が至淨の體、此れは乃　爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、アミン。

神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機密

を告げざらん、また爾にイゥダの如き接吻を爲さざらん、乃ち右盜の如く爾を承け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【　（大パスハ）領聖詞　】

※　全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。



司祭)（　黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨り罪なき者を拜むべし、ハリストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

新なるイェルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオンよ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を歡び給え、

嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せられし者の諸罪を滌い給え、

人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と願とに因りてなり、　）

※　全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。



司祭）神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

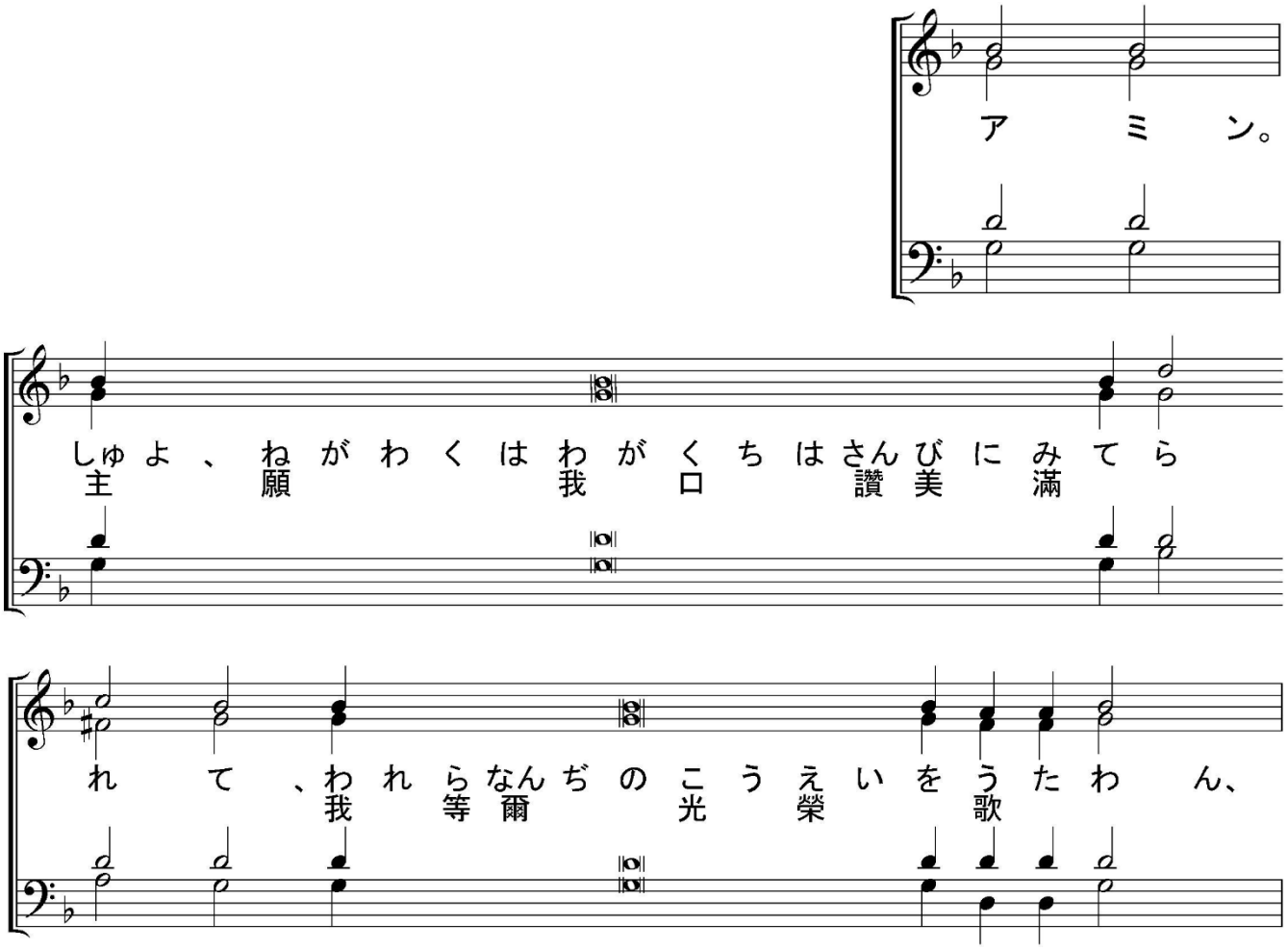






司祭)（ 黙誦：神(かみ)よ、願(ねがわ)くは爾(なんぢ)は諸天(しょてん)の上(うえ)に擧(あ)げられ、爾(なんぢ)の光榮(こうえい)は全地(ぜんち)を蔽(おお)わん、我等(われら)の神(かみ)は恒(つね)に崇(あが)め讃(ほ)めらる、 ）

司祭) 今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、





司祭) 謹みて立て、神聖・至浄・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐み護れよ、

司祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に

、



司祭) 平安にして出づべし、



司祭) 主に禱らん、



司祭）爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む者を遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、







誦經Ⓕ我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主を以て誇らん、温柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免れしめ給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことなし。少き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭)（ 黙誦: 親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せしハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、今も何時も世世に、 ）

司祭) 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世

に、



【 終結 】

司祭) ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父コンスタンチノーポリスの大主教聖金口イオアン、克肖捧神なる我諸神父、（ 某 ）日本の亞使徒大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、


ア　ミ　ン。

【　萬壽詞（ばんじゅし）　】


か　み　よ　わ　が　く　に　の　てん　の　う　お　よ　び
神　我　國　天　皇　及
く　に　を　つ　か　さ　ど　る　も　の
國
わ　れ　ら　の　ふ　しゅきょう　セ　ラ　フィ　ム、　お　よ　び　こ　と　ご　と
我　等　府　主　教　及　悉
く　の　せ　いきょう　の　ハリスティアニン　ら　を　い　く　と　せ
正　教　幾　歳



（　祈祷終了、十字架接吻　）

【　領聖感謝祝文（りょうせいかんしゃしゅくぶん）　】

誦経Ⓖ神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、

【　第一祝文　】　主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密に與る者と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを容し給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が靈と體とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅り、我が心の目を明かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、僞なき愛とし、睿智を充たし、爾の誡を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖に護られ、常に爾の恩寵を思い、復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を懷き、此の世を離れて、永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い盡されぬ美善を見る者の限りなき樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は爾を愛する者の眞の望と言い盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世世に讃め歌う、「アミン」

【第二祝文　聖大ヴァシリイの原文】　主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【　第三祝文 聖シメヲン「メタフラスト」の原詩　】　我が造成主、甘じて己の身を糧として我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く毋れ、乃吾が百體諸節心腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を明か

にし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐること、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日日に光榮を爾に獻ず、

【　第四祝文　】　主イイススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦と壯健と安樂とならん、又畏るる可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【　第五祝文　至聖生神女に捧ぐ　】　至聖なる女宰・生神女、我が昧みたる靈の光、吾が憑恃と皈嚮と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生みし者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讃榮せしめ給え、蓋爾は世世に讃美と光榮とを滿ち被る、「アミン」

2026 年 9 月 11 日　聖歌研修会用に編集